

(2) 流況

淀川水系の水源が、貯留能力の高い琵琶湖であることや、気候特性の異なる木津川や桂川であることから、流況は全国の他の主要河川に比べ安定している。

淀川流域の年間変動パターンは琵琶湖放流量と近似しており、琵琶湖が淀川の流量に大きく影響していることを表している。

各河川の基準点における流況は次のとおりである。

【表1 - 5 各河川の流量】

河川名	観測地点名 統計期間	流 量 (m ³ /秒)							年平均	年総量 (10 ⁶ m ³)
		最 大	豊 水	平 水	低 水	渇 水	最 小			
瀬田川	鳥居川	984.30	156.96	110.31	80.98	61.73	0.00	136.44	4,302.77	
	S27～H15	(欠測)	(欠測)	(欠測)	(欠測)	(欠測)	(欠測)	(欠測)	(欠測)	
桂 川	納 所	3,133.90	45.38	30.13	21.79	15.30	5.20	46.05	1,452.81	
	S30～H15	(欠測)	(欠測)	(欠測)	(欠測)	(欠測)	(欠測)	(欠測)	(欠測)	
宇治川	淀	1,979.52	189.67	137.31	100.96	79.26	33.00	176.63	5,571.53	
	S30～H15	(欠測)	(209.14)	(131.11)	(98.54)	(81.19)	(欠測)	(196.36)	(6,192.41)	
木津川	八 幡	4,744.00	45.89	28.23	19.55	12.02	0.00	50.26	1,550.62	
	S33～H15	(欠測)	(57.65)	(36.45)	(27.09)	(15.14)	(欠測)	(59.90)	(1,889.01)	
淀 川	枚方	7,970.00	276.78	193.03	147.23	108.67	42.54	267.33	8,452.96	
	S27～H15	(2,618.00)	(230.62)	(171.86)	(136.72)	(82.41)	(60.86)	(258.83)	(8,162.36)	
猪名川	軍行橋	1,571.70	6.91	4.20	1.97	0.82	0.00	8.21	260.69	
	S45～H15	(286.98)	(8.14)	(4.15)	(2.21)	(0.68)	(0.14)	(9.34)	(294.67)	

最大流量：1年を通じて最大の流量【上表の数字は各年の最大流量の最大】

豊水流量：1年を通じて95日はこれを下らない流量【上表の数字は各年の豊水流量の平均】

平水流量：1年を通じて185日はこれを下らない流量【上表の数字は各年の平水流量の平均】

低水流量：1年を通じて275日はこれを下らない流量【上表の数字は各年の低水流量の平均】

渇水流量：1年を通じて355日はこれを下らない流量【上表の数字は各年の渇水流量の平均】

最小流量：1年を通じて最小の流量【上表の数字は各年の最小流量の最小】

年平均流量：日平均流量の1年の総計を当年日数で除した流量【上表の数字は各年の年平均の平均】

年総量：日流量の1年の総計に、1日の秒数を乗じた値【上表の数字は各年の年総量の平均】

()内：平成15年の流量

(3) 治水

一般に、淀川下流が洪水になるときは、琵琶湖においても洪水になることが多い。このため琵琶湖からの放流量の調節は、上流域と下流域の住民の対立を解消する上での重要な課題であった。

琵琶湖唯一の流出河川である瀬田川の流下能力を増大させることは、琵琶湖での洪水を防止する最も基本的な方法である。江戸時代には幕府によって瀬田川の浚渫工事が実施されているが、その後、明治時代の「淀川改良工事」、昭和の「淀川改修基本計画」や「淀川水系工実施基本計画」に基づく治水事業など、淀川水系における主要な治水事業において、瀬田川の浚渫による流下能力の増大は必ず中心課題となった。

瀬田川の流下能力の増大と洗堰の設置により琵琶湖の水位を調節することが可能となり、洪水期の前にあらかじめ琵琶湖の水位を低下させておくことができるようになった。明治の淀川改良工事以降、琵琶湖の水位は低下してきており、湖岸の治水に効果をもたらしている。

さらに、昭和40年代には、湖岸の治水がさらに重視されるようになり、「琵琶湖総合開発計画」において、湖岸堤の築造、内水排除施設の整備、流入河川の改修などを含めた総合的な治水事業がなされた。その後、平成19年8月に「淀川水系河川整備基本方針」が策定されている。